

---

# 烙印　ーブランドー

カナメセ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

烙印　一ブランドー

### 【Nコード】

N5891X

### 【作者名】

カナメセ

### 【あらすじ】

貧しい村に奴隷商人が訪れた。その村では子供を奴隷商人に売る事で冬を越す。売られた少年は奴隷の烙印を押された。一生消えない焼印でる。その少年は美しい顔立ちをしていた為に高額で売られた。買ったのは貴族の男だった。

## 名を捨てる

北にそびえるウイリデイス山脈、そこに雪が降り始めたのは数日前。

山脈の麓にある、この小さな村にも、直に冬が訪れるだろう。

大陸最北に位置するこの地方は冬の訪れが早かった。

そんな、冬を間近に控えた村の集会場に、数人の男達が集まっていた。

「今日、皆に集まって貰ったのは他でもない……」

村長は一端言葉を切ると、集まった村人を順に見渡す。

村人は皆視線を落とし、口を開く者は居ない。それを確認して村長は話を続けた。

「じきに冬が来る。ボイドの奴もそろそろ来る頃じゃ。——今年には村の貯蓄も少ないでう。出来るだけ多く出したいと思うのじゃが、どうじゃ？」

村長の言葉に釣られるように1人の男がそっと手を挙げた。

「ふむ、1人か……ちと厳しいのう。——アムラ、お主んこのミネルはどうじゃ？ あん娘なら高く売れると思うのじゃがお」  
アムラと呼ばれた男はビクツと肩を震わせ、視線を上げた。

「ミ、ミネルは……」

そこまで言う唇を噛み締め言葉を詰まらせた。

「うむ、気持ちは解からんでもないがのう。お主の家も今のままじゃ冬を越せまい。それに村の為にもなる。まあミネルじゃのうても構わんが、どっちか一人出せんかのう？」

それは頼みの様な言い様ではあるが、ほぼ決定事項だった。

\*\*\*

この村の名をシルワ村と言う。

シルワ村は王都から北に、馬車で10数日かかる辺境と呼べる地域にある。

村人も100人程と少なく、皆が血縁で結ばれた小さな村だ。

今でこそ王都から10数日の距離だが、王国建国前はさらに遠く、あまりにも街から遠い為、どの国にも属さない自治村だった。

そんなシルワ村には、もちろん産業などは無く、近隣の森で狩猟を行い、自ら田畑を耕し、日々慎ましやかな生活を送っていた。が、それも数年前までのことである。

今からおよそ4、50年前、ウィリデイス山脈南の広大な森林の一部が伐採され、そこに城が建てられた。ヒストリア王国の建国である。

城の周囲は見る見るうちに平野と化し、王都が建設された。それに伴い近隣の集落は次々と王国に飲み込まれていくことになる。

そしてさらに時は流れた。

ヒストリア王国は更なる領地拡大の為、ウィリデイス山脈の麓にまで手を伸ばした。シルワ村はその領地内に含まれ、王国の保護下に入ることになる。

保護下と言っても名目上だけで、実際には村から国へ税を納めるだけである。王国側からは何一つ援助も支援もない。魔獣や獣、盗賊等に村が脅かされようと、王国から助けが来る事もなかった。

もちろん村人は王国の保護下に入る事に抵抗を示した。が、それも数ヶ月ともたなかった。

王国が100名程の兵士を送り、無理やり保護下へ入るよう強要したのだ。

それ以降村の暮らしは、どんどん苦しくなっていく。

今までは自らが耕す田畑と狩猟のみで、なんとか暮らしていたの

だ。その上税を取られれば生活が苦しくなるのは当然の事だった。それでも村人は助け合い、苦しい中なんとか生活を送っていた。しかし冬の訪れは狩猟を不可とした。田畑の収穫と少しの乾し肉で冬を越さねばならない。当然税としての農作物を納めれば冬を越せなくなる。税を納められなければ、その家の誰かが王国へと連れていかれる。それは大抵その家の子供だった。

王国の保護下に入った翌年の秋、税を納める期日の数日前に、1輦の馬車がシルワ村に訪れた。

その馬車に乗っていたのはボイドという奴隷商人だった。

ボイドは村長に頼み、村人を集めると、子供を買いたいと申し出た。もちろん村人達は皆一様に怒りを露にした。

ボイドは言葉巧みに説得をする。

「このまま冬を越せなければ一家が飢死するのですよ？ 飢死を逃れる為に税を納めなければ子供が王国に連れて行かれます。その子がどうなるかご存知ですか？」

そう言っただけでボイドは不気味な笑みを浮かべる。

皆はその顔を見て背筋に寒いものが走る。

「もし、わたくしめに子供をお売り頂ければ、金貨10枚以上が手に入ります。その金貨があれば2、3年は楽に生活が出来ます。そして村にも子供1人に付き金貨10枚を差し上げます。税の代わりに子供を取られ、わずかな農作物が残っても生活が楽になるわけではないでしょう？ 税を拒み一家飢え死にするより、どうせ子供1人失うなら、金貨10枚手に入れた方が得と言うものですよ？」

ボイドは男の子なら金貨10枚から15枚。女の子なら15から20枚ぐらいで買い取りたいと言った。実際幾ら払うかは、その子供の容姿、つまり髪の色、肌の色、目の色、などを考慮して決めるとのことだ。

ボイドは子供一人に付き、金貨20枚から30枚出す事になる。しかし、その子供はボイドから貴族や豪商達に金貨100枚以上で売られるのだ。特に容姿の優れた子供なら500枚で売れる事もある。しかし、村人達はそんなことは知らない。

そしてボイドを除いて村人だけで話し合いが行われた。

もちろん「子供を売るなどありえん！」と、だんこ反対する親も居た。しかしそれは税を払える者だった。実際払えない者は悩んだ。税を払えば一家皆が飢死する。しかし払わなければ子供が連れて行かれ、わずかな作物が残るだけ、たしかに子供を売るという行為が自身を苦しめる。しかし家族のことを考えれば売るのが一番なのだと理解していた。

村長も同じように悩んでいた。村長はその立場上、村全体の事を考えねばならない。ボイドは子供一人に付き、その家族に金貨10枚以上と、村へも金貨10枚を出すと言った。村に金があれば村を囲む柵を強化出来る。それ以外にも村を維持するには金がいる。そして、どうしても税を払えず、子供の居ない家庭を援助する事も出来る。子供の居ない家庭が税を払わなければ大人が連れて行かれる。大人が1人減るのは村としても避けたい。

しかしこの村は皆が血縁で結ばれた家族なのだ。村長からみれば、どの家庭の子供も一様に可愛かった。

その年、税を払う事が出来ない男が、噛み殺す様に言葉を吐いた。

「そ、村長が、決めて下さい……」

「わしにそれを決めさすのか」

村長は呟く様に言う。しかし村長である以上仕方ないと思っていた。

親が自分の子を売るなどと口が裂けても言えないだろう。しかしそうでもしなければ村は維持出来ない。数年の内には皆が餓死して

いくことは目に見えていた。

（村長であるわしが「売れ！」と言うのであれば、村の意思になる。皆は自身を責めなくて済む。卑怯かもしれないがそれが親なのだ。売られて行く子供も親に売られるより、村の意思で売られる方がマシであろうの）

そして毎年、冬が訪れる前、税の納期前に奴隷商人がシルワ村に訪れるようになった。

\*\*\*

アムラと呼ばれた男は即答出来ず、返事を待つて欲しいと告げた。村長としても強要しにくく、ボイドが来るまでに決めてくれれば良いと言った。

アムラの家には子供が2人居る。7歳の少女ミネルと8歳の少年レオンである。

村長はミネルを売るように勧めた。女の子の方が高く売れるからだ。その上ミネルは容姿に優れていた。村では珍しい金髪で肌も白く整った顔立ちをしている。たぶん金貨20枚は固いだろう。しかもミネルは病弱だった。そんなミネルを残しても村では役に立たない。

しかし、アムラは病弱なミネルだけに奴隷として生きていけるのか不安だった。

妻に相談しても泣き崩れるだけだった。だからと言って兄のレオンをと、そう簡単に決められるものでもない。レオンもミネルも同じように愛していたのだ。

しかし村長の言葉は決定事項なのだ。それが村の掟だった。村長もアムラ一家が憎いわけではない。ミネルが高く売れるから

と言う理由だけで言っているのでもない。

アムラの家は、畑が獣に襲われ今年の収穫がほとんど無かった。その上アムラはその獣を退治する時に怪我をし狩猟にもほとんど行けなかった。つまり治める税がないのだ。2人の子の内どちらかを売らねば冬を越せなかったからだ。

結局一晩中、夫婦で悩み続けたが答えは出なかった。

いや、答えは出ているのだが、それをお互いが口に出せなかったのだ。

数日後、シルワ村に1輛の馬車が訪れた。

傭兵の様な井手達の、男達数人に守られた2頭立ての幌付き馬車である。

荷台は幌で覆われている為、その中身は見る事が出来ない。

御者の横に座っていたボイドが、重そうな身体を引き摺るように村に降り立った。

見るからに、いやらしい笑みを浮かべ、身体を揺らすように歩くその姿は、上等な上着のボタンを引き千切ろうとしているようだ。

一方の馬車を迎え入れた村人は、ボイドの来訪に嫌悪感を抱いていた。

たしかに村に金を落としてくれるのはありがたい。だが、その見返りが酷すぎるのだ。

ボイドの前に少年2人が連れてこられた。1人はレオンである。

アムラ夫婦は結局ミネル手放せなかった。その美しい容姿のため、性奴隷にされることを想像してしまったのだ。しかし、レオンは男の子だから肉体労働に従事されるだろう。ミネルほど苦しまなくて済むのではないか？　と思ったのだ。



ボイドの前に連れてこられた2人の少年は、意味も分からずボイドを見あげている。ボイドはそんな2人を舐めるような眼差しで見つめた。しかし、レオンを一目見て目を輝かせた。思わず零れそうになる笑みを噛み殺し平静を装ったのだ。

レオンの容姿は、男にしておくのは勿体無いほど素晴らしかった。服装は粗末で汚いが、見事な金髪、整った顔立ちが貴賓さえ感じさせる。こんな村にこれ程の子供が居るとは想像すらしていなかったのだろう。磨けば必ず金貨数100枚で売れるだろうと予想したのだ。

そしてあくまで平静を装いながら、少しの感嘆を込め、言葉を口にした。

「おお、綺麗な顔立ちをしていますなあ、この金の髪も素晴らしい。本来なら男の子には金貨15枚までなのですが、この子なら20枚出しましょう。もう一人は、んゝ13枚で如何でしょうか？」

レオンともう1人の少年は、自分達が売られるとは知らない。このボイドという太った男が何を言っているのか意味を理解出来ていなかった。

ボイドは自分の言い値がそのままの値段になる事を知っている。村人が値を吊上げる事をしないからだ。しかしレオンには過去最高額といえる金貨20枚を提示した。本来なら男の子には15枚が最高なのだが、これ程の逸材なら20枚出せるのだと言う所を見せたかったのだろう。

2人の少年がボイドに引き渡された。すぐさま傭兵風の男2人が、少年を後ろ手に縛り上げようとする。少年達は驚き逃れようとするが、大人の力に敵うはずも無く、瞬く間に縛り上げられた。

少年達は「助けて」などと叫ぶが、父親も母親も視線を逸らし、

助けようとする気配が無い。他の村人も悲痛な面持ちで視線を逸らせている。それでも少年達は叫び続けた。

少年達の視界には、ボイドから村長に革の袋が渡される光景が映っている。

村長はそれを受け取ると中身を取り出した。

それは金色で平べったく丸い形をしていた。

そしてその枚数を確認し、アルムともう1人の少年の親に、それぞれ渡しているのだ。

そこでレオンはそれが金貨だと理解した。

実際には銅貨しか見たことが無い。しかし先程の会話でも金貨と言葉が出ていた。

レオンは、この時始めて自分達が売られた事に気が付いた。

家を出るとき、父と母に抱きしめられた。あれが別れの挨拶だったのだろうと今更ながらに気が付いたのだった。

レオンは叫ぶのをやめた。

もう1人の少年はまだ叫び続けている。売られた事に気が付いていないのかもしれないが、分かっているにも信じられないでいるのかもしれない。

レオンはもう一度父と母に視線を向けるが、2人はレオンを見ようとしない。そして妹のミネルに視線を向けた。妹は驚いて母親にしがみ付いている。そして「お兄ちゃんを助けて」と泣いている。

レオンは、ここ数日、父親と母親が暗い顔をしていたことを思い出す。

「ミネルには無理よ」

「ならレオンにするのか？」

「そんなこと言ってないわ。どちらかなんて選べないわよ」

夜布団に入ると、そう言い合う声が微かに聞こえていた。その時は何を言っているのか分からなかったし、それを問いたです事も出来なかった。

しかし今になってその意味を理解できた。

父親と母親は、レオンとミネル、どちらを売るか、言い争っていたのだ。

そして結局レオンを売る事にしたのだろう。

レオンは正直ミネルで無くて良かったと思った。

父親と母親が自分を売る。それを悲しく思う気持ちはあるが、もしこれがミネルだったらと思うと恐ろしさのあまり、寒気がする思いだった。

そして、僕を捨てたんだから、ミネルだけは絶対に幸せにしてやっ  
つてと願っていた。

レオンはミネルの顔を脳裏に焼き付け、そのまま自ら馬車へと乗り込んで行った。

馬車の中には数人の子供が座っていた。

女の子2人と男の子1人。3人とも10歳に満たない子供達だった。

その子供達は後ろ手に縛られ、それぞれのロープの先は馬車に括り付けられている。

レオンともう1人の少年も、開いている所に座らされ、後ろでのロープを馬車に括りつけられた。さらに荷馬車の出入り口に傭兵風の男2人が座る。これでもう逃げ出す事は不可能だろう。

馬車はゆっくりと動き出した。まだミネルの声が聞こえる。悲痛な叫び声だった。

レオンは耳を塞ぎたかったが縛られた状態ではそれも不可能だった。

次第にミネルの声が遠ざかり、ついには聞こえなくなった。

隣に座る女の子が小さな声で話しかけてきた。

「あなたも売られたの？」

「うん、そうみたいだ」

「そうなんだ、あなた名前はなんて言うの？」

「名前？ ……」

そこまで言うと、レオンは口を閉ざした。

女の子は小首を傾げ、「？」という表情をしている。

レオンは自分の名前を誇りに思っていた。

レオンとは獅子のことだ。

獅子は百獣の王だ。それが縛られたら王ではない。つまり、もう獅子ではないと考えた。

（僕はもうレオンじゃないんだ）

「もう名前は無いかな。売られたんだから、名前は無いよ」

## 奴隸の烙印

馬車の中は思いのほか静かだった。たまに子供達のむせび泣く声が微かに聞こえるが、会話を交わす者は殆どいない。皆が一樣に不安を感じ、最後部に座る傭兵風の男に脅威を感じているのかも知れない。

レオンに話しかけてきた少女もあれ以降、口を開こうとしなかった。

外からは時折、ボイドと御者だろうか？ 2人の声が微かに聞こえてくる。それ以外は小気味良いリズムで馬の蹄の音が聞こえた。たまに小鳥のさえずる声も聞こえるから、森林を抜ける村道を走っているのかも知れない。

1人の少女のすすり泣く声が次第に大きくなってきた。すると釣られる様に、他の子供たちの泣き声も大きくなる。

「おい、うるせーぞ。静かにしろ」

大きくは無いがドスの聞いた鋭い声が後部に座る男から発せられた。

「ヒィッ！」っという小さな悲鳴をあげて黙り込む少女。他の子供達も一斉に泣き止み、馬車はまた静まり返る。

レオンはなにげなく視線を上げその男に目を向けた。

短髪で頬に傷があり、肌は浅黒い。目も鋭く、いかにも傭兵といった感じだ。

もう1人の男は、頬に傷は無いが、濃い髭があり、同じような印象を受ける。

しばらく見ていると頬に傷のある男がレオンに視線を向けた。

視線が合ってしまったようだ。

「ん？ 文句あるのか小僧」

「えっ、いや…… もう少し優しく言ってあげても良いんじゃないかな、と……」

男は少し驚いた表情を見せたが、すぐに厳しい表情に戻る。

「ふんっ、優しく言って聞くならそうしてやりてーがよー。きつく言わなきゃ泣き止まねーんだよ」

たしかにそうかも知れないとレオンは思った。辛い時、悲しい時、誰かに優しくされたら泣いてしまうことがある。かつてレオンもそういう経験があったのだろう。

「たしかにおめーらは不憫だと思うがな。おめーらが煩くすりゃー俺達がボイドの旦那に叱られるんだ」

「そうなんだ。――――ごめん」

レオンが頭を下げると、男はどこか所在無さげな表情を見せた。

「チッ！ どうもおめーはやりにくいな。――――まあ叱られるくらい構わねーんだがよ。おめーらは叱られるだけじゃ済まねーぜ？ 下手すりゃ「見せしめだ」つつって鞭を貰う事になる。さすがにおめーらみてーなガキが鞭で打たれるとこなんざ見たくねーからよ……」

男が口にした『鞭で打たれる』という言葉に、子供達がビクッと反応した。そしてまた、すすり泣く。今にも声をあげて泣き出しそうな子もいる。

男は慌てて声をあげる。

「おい、泣くな！ 鞭つつてもおめーらは売りもんだ、そんなきつく打たれる事はねえから安心しろ」

子供達はその言葉で少し落ち着きを取り戻す。

もちろん男は嘘を言っている。

たしかに子供達は売り物である。消えない傷が出来るほどは強く打たれないだろう。それでも数日は打たれた傷で眠れないほどの痛みを伴う事になる。

レオンはそんな男をジッと見ていた。

男は少し頬を赤らめ視線を逸らす。

レオンは、そんな男を、顔に似合わず優しい人なんだと思った。そんな雰囲気嫌うように男が話を変えた。

「そういや、おめーは全然泣かぬーな。自分の立場解かってるか？」

「うん、たぶん。――――奴隷になるんだよね？」

「えらく冷めたガキだな。なんで泣かぬえ？ 怖くないのか？」

「うん。少し怖いけど、それより嬉しいから……」

「嬉しいだあ？ おめー、頭大丈夫か」

「えっ？ そ、そうかな。でも、僕が売られなかったら、妹が売られてたと思うから、僕が売られて良かったなって…… だから嬉しいんだ」

「……」

傷の男が目を見開き、すこし驚いた表情を見せる。そしてどこか納得したような優しい目付きに変わっていた。

「なるほどなあ、俺にも妹がいるんだがな。もしあいつが奴隷なんかにされると思うと、どんなことをしても、変ってやりてえって思うぜ」

「うん」

レオンは何故か笑顔で返事をしていた。

馬車は1日の内、何度か止まり休憩を取る。その時だけは、後ろ手に縛られたロープが外された。ロープで縛られた手首には血が滲

んでいる。

食事は馬車の中で食べる。食事といっても、乾パンや燻製の肉など、たまに出された具なしスープは寒いこの時期にはありがたかった。

しかし、トイレ以外で外に出る事は、許してもらえなかった。

そうして何日か旅を続けていると、次第に子供同士の会話が生まれる。

傭兵風の男達も、静かに喋る分には文句は言わなかった。たまに会話が弾み声が大きくなれば、もちろん注意はされた。

途中、別の村に立ち寄った。馬車の外ではなにやら声が聞こえる。どうやらこの村でも子供を買っているようだ。

しばらくすると、子供の泣き声が聞こえてきた。そして嫌がる2人の女の子が、馬車に乗せられた。レオンと同じか少し上かもしれない、10歳前後の少女だった。

そしてまた旅は続く。

レオンは村を出て何日発ったのか忘れていた。覚えてても意味がないと思ったのだ。

休憩の時にボイドがもうじき王都に着くと言った。

いよいよ旅が終わるのかも知れないとレオンは思った。それと同じに不安にもなる。

他の子供達の顔も不安の色が濃くなっている。

「まあ、そんな怯えた顔をするな。俺の邸に付いたら身体を洗ってやる。それで綺麗な服も着せてやるぞ。お前達が今まで見た事も無いような上等な服だ。楽しみにしときな」



ガハハハと賓のない笑い声を上げている。

子供達のうち、女の子は一瞬目を輝かせた。奴隷の意味が解かっていないのかも知れない。

しかし傭兵の男の何人かは顔をしかめている。軽蔑するような眼差しでボイドを睨んでいた。

レオンは旅の道中で、なんだか頬に傷のある男と会話をしていた。護衛の男達は、皆傭兵ギルドの男達だと言った。戦の無い時は、こういう護衛の仕事や盗賊狩りなど、依頼があれば何でもするらしい。

奴隷商人の馬車の護衛、一番嫌な仕事だと言っていた。

その翌日、馬車は王都に到着した。馬車の中からでも活気ある人々の声が聞こえる。

レオンは王都や街といった人が多く住む所に来た事が無い。

途中何度か宿場町に馬車を止めることがあったが、そのときもトイレ以外は馬車の中、もちろん寝るのも馬車の中だった。

あまりの喧騒に、驚きを隠せないレオン。外が気になってしょうがないようだ。

レオンは傭兵の男に頼んでみた。

「ねえ、少しでも良いから、外が見たいんだけど」

「ん、外をか？ 別になんもないぞ？」

「うん、でも見たいんだ。王都って来た事が無いから」

「そうか、じゃちょっとだけだぞ」

そう言って頬に傷のある傭兵が、馬車後部の扉を少し開け、外を見えるようにしてくれた。

そこには色取り取りの装いをした人々や、多くの商店など、見たことのない景色が広がっていた。レオンはそんな景色に目を奪われていた。よくみると他の子供達も同じように目を丸くして扉の隙間を覗いている。

馬車は多くの商店が並ぶ大通りを過ぎると、住宅が並ぶ通りにでた。

その一角、大きな邸の門を潜ると、邸の玄関前に馬車は停められた。

すぐさま邸から使用人らしき男女がボイドを出迎え、ボイドの指示で子供達も馬車から降ろされた。

子供達は目の前の邸の大きさに目を奪われている。

頬に傷がある男が呟いた。

「チッ！ 子供の売り買いで、こんなでつけえ邸に住みやがって……」

「ん、なにか言ったか？」

ボイドは、その呟きが聞こえたのか、その男に聞き返した。

「いや、別に…… それじゃ俺達の仕事は終わりだな。帰らせてもらうぜ」

「ああ、ご苦労。次もよろしく頼むぞ」

「あいよ……」

傭兵達は帰っていく。その中の1人、頬に傷のある傭兵、レオンと一番親しくした男がレオンに近づいて、声を掛けた。

「じゃあな坊主、負けんなよ。生きてりゃそのうち、良い事もあるかもしれない」

その表情は苦痛に歪んでいるようにレオンには感じた。

しかしレオンは、出来るだけ明るく答えようと思った。

「うん、ありがとう」

傭兵達が出て行くと、ボイドは使用人に命令する。

「おい、ガキどもを洗え、臭くて適わん」

たしかに数日の旅で子供達は臭かった。しかしそれはボイドも同

じである。さらにボイドは汗かきだった。その上加齢臭もまざっている。

口にこそ出さないが、「ご主人様の方が臭いですよ」と使用人達は心の中で呟いていた。

子供達は風呂に入れるんだと、少し表情を崩した。さすがの長旅で身体を洗いたかったのだろう。

しかし、そんな甘い考えはすぐに打ち消される。

その場で服を、ぼろ布を捨てる様に剥ぎ取られたのだ。

子供といえど、10歳近くにもなれば羞恥心がある。特に女の子などは、悲鳴をあげて抵抗した。しかしボイドはそんな子供達に一喝した。

「奴隷が喚くんじやないっ！ 少しでも逆らえば鞭が飛ぶと思え！」涙を流しながら、されるままになる子供達。

レオンも他の子供達も、奴隷と言うものがどういうものか理解したようだ。

しかし、まだ理解が足りない。その事はさらに後で知る事になる。

そして庭先で、井戸の水で身体を洗われる。

夏でも冷たい井戸の水である、そろそろ晩秋のこの季節には身も凍る思いだった。

身体を洗われた子供達は、そのままの姿でボイドの前に連れて行かれた。

ボイドの前に立ちすくむ子供達。その手は一樣に身体の前部分を隠している。

「おい、手をどけろ」

恐る恐る手をどける子供達。ボイドは野卑な笑みを浮かべ1人1

人嘗め回すように身体をチェックする。

「今日からお前達は奴隷になる。奴隷は一生奴隷なのだ。わかるか？」

子供達は恥ずかしさと恐怖でボイドの声が聞こえてるのかどうかもわからない。

怯えと恐怖で俯いている。もちろんレオン以外の子供達は涙をロボロ床に落としていた。

レオンは涙こそ流していないが、悔しさでいっぱいだった。しかし、ほんとうに僕で良かったと心からほっとした部分もあった。

「まあ、今すぐわかる事になる。——おい、準備出来たか？」  
「はい、すぐにお持ちします」

そして使用人が、焼きゴテと火鉢のような物を持ってきた。

無知な子供達でも、それが何かすぐに理解出来たようだ。

村などで家畜を飼っていたら、目にする機会もあったのかもしれない。

「これが何かわかってるようだな……ふふふっ」

歯をガチガチ言わせ全身を振るわせる子供達。恐怖で失禁する者も居たほどだ。

「これは奴隷の烙印だ。この烙印を押された者は、一生奴隷なのだ」  
恐怖で震え上がる子供達を、嬉しそうに眺めるボイド。

さすがに慣れているとはいえ、使用人たちも顔を背ける思いだった。

邸に、絶叫のような悲鳴がしばらく鳴り響いた。

消える事の無い奴隷の印<sup>しるし</sup>。

火で熱く焼かれた鉄のコテを、腕に押し当て焼き付けるのだ。それは一生消える事が無い。

レオン達は一生消える事の無い奴隷の烙印を押されたのだ。

## 奴隸として

烙印を押された夜、子供達は庭にある小屋に連れて行かれた。そこは奴隸小屋と呼ばれていた。

小屋の中は部屋が一つだけ。窓も無ければ家具一つない。

しかしトイレは完備されていた。だが、個室ではなく便器が置いてあるだけ。

つまり、皆の目に晒されながら用を済まさなければならぬのだ。

子供達は男女関係無く、全員がその奴隸小屋で一日過ごすのだと言われた。

もちろん寝るのもこの小屋である。

ベッドなんて物はない。敷布団などもない。固い床に直に寝るのだ。

あるのは薄く汚い毛布一枚のみ。

薄い壁は隙間だらけで、冷たい夜風が無常に吹きぬける。

救いといえば、皆が一緒に過ごせる事だけだったかもしれない。

その夜は皆が焼かれた腕の痛みで眠れなかった。

恐怖で声こそ出さないものの、奴隸小屋の中は一晩中子供達のむせび泣く声が、消えることはなかった。

翌日から、拷問の様な日々が続いた。

勝手に口を開く事は禁じられ、泣く事も笑う事も許されなかった。食事も床で食べるように強要された。

何かの仕事を押し付けられる訳ではない。

勉強をさせられる訳でもない。

何もせず、ただジッと一日過ごすのだ。

トイレすら決まった時間以外に行く事は許されなかった。

身体を動かしてもダメ、頭を掻いてもダメ、視線を動かしてもダメ。

命令が無い限り置物の様にジッとしているだけ。

しかし、笑えと命令されれば直ぐに笑わないと殴られる。泣けと命令されれば直ぐに泣かないと殴られる。言われたことには直ぐに対応し、それ以外はただジッとしているだけ。それが出来るまで、延々と拷問の様な日々が続くのだ。

ボイドはある日自慢げに言った。

「俺の奴隷どもは貴族や豪商達に人気があるんだよ。何故かわかるか？」

誰も答える者は居ない。

「俺の奴隷どもはなあ、感情を殺せるように調教するからだ。感情なんてものは、買った客に合わせればいい。泣き喚く奴隷が好きな客も居れば、嫌いな客もいる。無言無表情で仕事をこなす奴隷が好きな客もいれば、世辞を言い媚びる奴隷が好きな客もいる。それぞれの客に即対応出来るようにしてから売る。だから俺の奴隷どもは高値で売れるんだよ」

最初に感情を殺せるようになったのはレオンだった。

ボイドは、これほど早く仕上がった奴隷は、初めてだと喜んでいった。

レオンを奴隷小屋から出すと、使用人達に身体を隅々まで洗われてから、邸に連れて行かせた。そして金の髪を櫛で整え、上等な服を着せさせた。

レオンが居る部屋とは別の場所に数人の男女が集まっていた。

皆上等な服を綺麗に着こなした貴族や豪商達である。

「えー、すでにご承知かと思いますが、来月の終わりごろ奴隷の競売を行います。しかし本日皆様にお集まり頂いたのは他でもありません。皆様にはいつも格別の御贔屓頂いている我ボイド商会のさやかなる気持ちとして、競売前に奴隷どもをご覧になって頂き、競売時の参考になればと考えた次第でございます」

この時代、カタログなどは存在しない。つまり競売前に、どんな奴隷が出品されるのか、買い手は知らない。そのため、競り落とした後に出てきた奴隷の方が良かった。という事が多々ある。そんな失敗買いを避けるために、常連のお得意様だけに事前に奴隷を見せるのだ。

「さらに、本日は極上物の奴隷が、すでに調教を済ませております。もし内密にして頂けるのであれば、値段次第では御座いますが、本日お買い上げ下さっても構いません」

野卑な笑みを浮かべたボイドが、そう述べると貴族達から「おお」と歓声があがる。

もちろん競売で、皆に競い合わせて買わせた方が、値段が上がるだろう。しかし一見<sup>いちげん</sup>の客に買われてしまうことがある。一見といっても紹介がなければ競売に参加出来ない仕組みなので、それなりの金持ちなのだが、特に上物の奴隷がそんな一見の客に買われれば、普段贔屓にしている常連客に不評を買うことになる。それを避けるための手段だった。

そんな常連客の前に連れてこられた、レオン以外の子供達。

まだ調教が終わっておらず、それぞれの目に恐怖の色がみてとれた。



客達は、それぞれ気に入った奴隷の名前を確認していく。  
そしてその子供達が部屋から退出すると、つぎにレオンが紹介された。

レオンにいたっては紹介ではなく、売り物扱いなので綺麗に身支度を済ませていたのだ。

皆の目が開かれレオンに視線が注がれる。

感嘆の声とともに、溜め息まで漏らす客もいた。

ボイドは得意の客のうち、幼い少年を好んで買う客のみを集めていた。

「如何でしょうか？ 我ボイド商会自慢の奴隷で御座います」

「うむ、これほどの上物は見たことが無い。しかし……少女ならもつと良かった……」

「そう言えば、ボルジュ伯は両刀でしたなあ」

「たしかに仰る通りですが、これほどの上物、お譲りする気はありませんよ」

「わたくしも是非欲しいですわ。こんな綺麗な子と……」

「ベントニー公爵夫人。涎が出ていますぞ」

「ま、まあ、失礼な」

そう言って口を拭う公爵夫人。

「はははっ、冗談ですよ」

「で、ボイドよ。この少年は幾らで売るのだ？」

「そうですね、競売に出すなら500万からと考えていましたが？」

「うむ、500か、さすがに高いのう」

「あら、リンド公ともあろうお方が、500万くらいでそのようなことを仰っては如何なものかと……」

「ふふふっ、わたくしは600万出しますわ」

「むっ、では、わしは650万出そう」

「……」  
「……」  
「……」

レオンは終始無表情でその会話を聞いていた。

思わず顔がにやけそうになる。地獄のような毎日で身に付けた無表情が役にたっている。

レオンは仲間の子供達のことは心配だが、売られて早くこの邸から出たかったのだ。

## 酒場にて

王都の裏通りにある小さな酒場、ここはいつも活気が溢れていた。客の男達は店の給仕を冷やかし、からかっている。

とは言っても、陰湿なものではない。

その給仕は名前をメアリーといい、こここの看板娘でる。客達はこの娘見たさに通う者が殆どだったのだ。しかし下手に手を出す男はいない。

そんな酒場のカウンターに、1人座り静かに飲んでいる客がいた。その男は店の扉が開くたびに来客を確認するように首を巡らせていた。

そんな男に給仕であるメアリーが声をかけた。

「ガザブルさん、今日は大人しいけど、どうかしたの？」

「あ、いや、ちと人と待ち合わせをしてるんでな」

「そうなんだ、もしかして恋人ですか？」

「そんなんじゃないよ」

「ふふっ、早く来るといいですね♪」

「そんなんじゃないって言うてんだろ！」

「あははっ！」

しばらくして1人の若い女が酒場の扉を開けた。

ガザブルと呼ばれた男は、その女を確認するとメアリーに「テーブルに移るわ」と言っ店の隅のテーブル席へと移動した。

今店に訪れた若い女性客も同じテーブル席に座る。

注文ついでに、ガザブルを冷やかすメアリー。

ガザブルは顔をしかめ「仕事をしろ」とメアリーを邪険にする。

そんなメアリーに、女はワインを頼んだ。

しぶしぶ仕事に戻るメアリー、しかしその耳はピクピクと動いていた。

店の片隅のテーブルで密会する二人の声は極々小さいものだった。さらに周囲の喧騒にかき消され、まったく聞き取る事が出来ない。しばらくして女は立ち上がり、1人で店を出て行った。

日付がそろそろ変わる時間となり店の客はガザブル1人になる。

女が出て行ったあと、一度もガザブルに声を掛けなかったメアリーが、他の客が消えると話しかけてきた。

「ねえ、いったい何をしようとしてるの？」

メアリーは真剣な面持ちでガザブルに問いかける。

ガザブルとしては、そんなメアリーを見た事が無く、少し戸惑いながらも、平静を保ち静かに答えた。

「なんのことだ？　ただ連れと飲んただけじゃねえか。ってかガキが何時までもこんな店にいるんじゃない、帰ってさっさと寝やがれ」

「見た目で判断してくれるのは嬉しいけど、私は獣人よ？」

その言葉でガザブルは、はっとなる。

そうだった。この女は獣人。見た目は大きな耳がある以外は普通の人間そのものだ。

見た目の愛らしさで、つい十代後半の少女と見間違うが、実際は謎だった。

擦れた言動や、酔っ払いのあしらいが巧いことなどから、そう若くはないのだろう。

そしてガザブルはメアリーの大きな耳に視線を向けた。

「ちっ！　そうだったな……　ってことは何か、さっきの会話も全

部聞こえてたってわけか？」

「まあ、大体はね」

「そうか…… まあ別に、なんもする気はねえよ。ただ——ちよつと気になったから聞いてただけだ」

「ふくん。わざわざお金を払って、見ず知らずの奴隷の情報を？」

「………… おめーにや関係ねえだろう？　なんで首を突っ込む？」

「んー、そうねえ。もしあなたが、その奴隷を助けようと考えてるなら、手助けしてもいいかなってね」

「なんだと？　それこそおめーにやあ関係ねえだろう。それに人間の奴隷だぜ？　なんで猫獣人のおめーが助けようなんて思う？」

「奴隷を助けようなんて人間は珍しいわ。そんなあなたを気に入った。それだけよ」

赤面し絶句するガザブル。

「ふふっ。誤解しないでね。別にあなたのことが好きだとか言ってるわけじゃないわよ？」

「う、うるせえ！　んなこたあ解かってらあー。チツ、これだから擦れた女は嫌いなんだよ」

「ふふっ、まあまんざら嫌いでもないんだけどね。ていうか、一つ聞いても良いかしら？」

「な、なんでえ？」

「どうして見ず知らずの奴隷の子を助けようと思ったの？」

ガザブルは視線をメアリーから外し、どこか遠くを見つめる様な目をした。

「あのガキが…… 奴隷になれて良かったって言いやがったんだ」

「良かった？　奴隷になったことを喜んでるって言うの？」

「ああ、はつきりそう言いやがった。それも笑顔でな」

「……信じられない。でも、それならどうして助けるの？」

「喜んじやいたが、奴隷に成りたいわけじゃねえからだよ」

「全然意味が解からないんだけど？」

「ん、ああそうだな。すまねえ、俺は説明が下手だからよ。詳しく言うのだな、――あのガキにゃあな、妹がいるんだよ。もし自分が奴隷として売られなかったら妹が売られていた。だから自分が売られて良かったって言いやがった」

「つまり、妹さんの身代わりってことかしら？」

「さあ、そういうことになるのかもな」

「……」

ガザブルはメアリーの強力を得る事にした。

本来は1人で事を起し、誰にも手を借りるつもりはなかった。助けるとは言っても、奴隷の誘拐である。れっきとした犯罪だになるのだ。

しかしメアリーは言い切った。

「もし、手伝わせないって言うなら、通報するわよ？」と。

ガザブルはしぶしぶであるが、了承するしかなかったのだ。

しかし獣人の身体能力は人間を上回り、たとえ女であっても並みの傭兵より強い。

これほど強力な助っ人は居ないかもしれない。

ガザブルが密会をしていた女性はボイド邸のメイドであった。

そのメイドに金を渡し、レオンの情報を得ていた。

そして数日後に競売の前に、上客のみを集めた奴隷披露と、レオンの売買が行われるかもしれないという情報を得たのだ。

さすがに私兵のいるボイド邸に忍び込み、助け出すのは至難の業である。ガザブル1人では絶対に不可能だろうし、メアリーを仲間に加えたとしてもその成功率は皆無に近いといえる。

そして、貴族に買われ、その邸に連れて行かれた後も同じである。貴族の邸にもボイド邸にも勝る私兵がいるからだ。

つまり助け出すなら移動の途中、ボイド邸を出たあと、貴族の邸に着くまでだった。

## 尾行

レオンは男子としては過去最高額の800万という高値でデイスワード伯爵という初老の貴族に買われていった。デイスワード卿は貴族の間でも小児性愛者として密かに知れ渡っていた。

デイスワード卿は妻と死に別れ息子達も独立し今は領地の邸にて1人で暮らしている。

もちろん家族は1人と言う意味で、メイドや執事、お抱えの兵が邸に同居している。

レオンとデイスワード卿を乗せた馬車は王都を出ると一路東を目指していた。デイスワード卿の邸が王都の東、馬車で4日ほどの片田舎に建てられているからだ。

その馬車の後方を2頭の馬が尾行するように走っている。

馬車と尾行する馬の距離は、肉眼では捉えられない間隔を保っていた。それほど距離を保ちながら尾行が行えるのは猫獣人であるメアリーの存在が大きかった。メアリーはその優れた聴覚により遙か先を進む馬車の車輪の音や馬蹄の音を聞き取り尾行を行っていたのだ。

御者台には中年の男が1人馬を操っている。

馬車の周りには3頭の馬がそれぞれ厳つい男を背に跨らせていた。ガザブル達は、馬車の大きさから、中に乗っているのはデイスワード卿と奴隷の子供1人だけだろうと予想していた。

速歩程度の速さで馬を並んで走らせる2人。その内の1人メアリーが同行者に声を掛けた。



「警戒するのは護衛の3人だけね」

「ああ、だがあの3人、なかなかの使い手だぜ」

答えたのはガザブル。頬に傷のある傭兵だった。

「ええ、わかってる。あなた1人じゃ厳しかったってこともね」

「なんだとお？ ああ程度、俺1人で十分だったぜ」

「うふふっ」

ガザブルは強がって見せたが、実際1人だと厳しかったと自分でも理解していた。

個々の実力なら負ける気はしなかったが、同時に3人相手は厳しい。さらに分断させても奴隷を人質に取られれば手が出せなくなるからだ。

笑みを浮かべていたメアリーが真顔になり質問する。

「で、いつ襲うの？」

「そうだな、王都から近すぎてもやばいし、2日目の野営時だな」

思考を巡らせながら答えるガザブル。それを横目で、訝しむ表情で見つめるメアリー。

「ふうん、じゃあ今日の野営時は襲わないってことね……」

「ん？ やけに意味深な物の言い方をするじゃねえか？」

そんなメアリーに対しガザブルも怪訝な表情を見せる。

「いえ別に…… ただ今晚はあなたと2人きりで野営するんだなっ

てね」

「て、てめえ何考えてやがる」

少し赤面するガザブルに対しメアリーは笑いを噛み殺すような表情をしている。

「別に何も…… あなたこそ何を考えたのかしら？」

「……このアマ……」

「っふふふ」

ころころ表情を変えるメアリー。小悪魔的な笑みを浮かべている。しかし、すぐに真剣な面持ちに変わっていた。

ガザブルはメアリーの表情が真剣になったことで、自身も渋々怒るのを止め、誤魔化すように頭を掻いた。

「まあ野営時っていうのは定石でしょうね。でも相手は3人、こちららは2人よ。そのあたりはどう考えてるの？」

「俺が1人で突っ込んで3人を誘き出す。3人が馬車から離れたら、おめーがガキを救い出せ」

「それで？」

「？ それでもクソもねえ、それだけだ。事はそれで終わる」

ガザブルは自身満々で述べているがメアリーは呆れ顔である。

「あなた、それ本気で言ってる？」

「あたりめえだ！」

「3人が誘いに乗らなかったら？ てゆうか、絶対に乗ってこないわよ？」

「なんでそんなことおめーに解かるんだ？」

「当然じゃない。やつらはあなたの事を山賊か盗賊だと思っわよね」

？」

「まあそうだろうな」

「なら仲間が何処かに隠れてるって思うのが当然よね？」

「……まあ、そう、かもな」

「そんな状態で3人共が馬車を離れると思う？　よくて1人、それも馬車から見える範囲、2人は絶対に馬車から離れない。あなたも護衛任務をしてるなら解かりそうなものだけど……」

「……」

「あなたって腕は確かそうだけど、頭は弱そうね……」

「な、なんだとお！」

ガザブルはその身をプルプル震わせ、怒りを露にしていた。

そんなガザブルを軽くあしらうメアリー。

酒場で給仕をするメアリーには造作もないことだった。

「はいはい、怒らない、怒らない。————作戦はわたしが考えるから、あなたはそれに従って。いいわね？」

「つまんねえ作戦考えやがったら、マジで犯すぞ！」

「いいわよ。あなたにそんな勇気があるのならね……」

「……チツ……」

「ふふっ。じゃわたしの考えを言うわね。————まず————」

メアリーの作戦と言うのは、夫婦2人旅を演じ、野営時の馬車に近づき相伴させて貰うと言うものだった。食事中に出来るだけ護衛達と打ち解け、隙があれば眠り薬を飲ませる。それが失敗に終わっても夜中には護衛の1人か2人は寝るだろうから、その時に事を起すという作戦だった。

その場その場で臨機応変な対応が要求されることになるだろうか、ガザブルは出来るだけ大人しい気弱な亭主を演じ、酒場で男の扱いに馴れたメアリーが主導権を握り護衛達に酒を飲ませ警戒を緩

める様に仕向けるというものである。

メアリーの見かけによらぬ豊満な体と美しい容姿、酒場で毎晩酔っ払いをあしらう口の上手さは十分理解しているガザブルである。たしかに自分の考えた作戦より数倍成功率が高いだろうと納得するしかなかったようだ。

しかし、すでにガザブルの面子は丸つぶれである。

もしもこの2人が、本当の夫婦になるような事があれば、ガザブルが尻に叱れるのは、火を見るより明らかだろう……

しかし1日目の野営時に予想もしないことが怒った。

もちろん肉眼で見える距離に居るわけではないので、ガザブルには解からなかったが、メアリーの耳がそれを捉えていた。

緊急事態と判断せざる終えない音や声がメアリーの耳に届いたのだ。

## 逃亡と救出

王都から東に向かう街道に夕闇の帳が降り始めた頃、デイスワード卿の馬車は路肩に停められた。

護衛に就いている私兵や御者が火を起し、食事の準備に取り掛かった。

どうやら今日はここで野営をするようだ。

野営の準備が終わり、食事となるとレオンも馬車の中から降ろされた。

手枷は無いが腰にはロープが結ばれていた。その顔には疲労が色濃く表われている。

食事が終わると、そそくさとデイスワード卿はレオンを連れて馬車の中へと消える。

護衛達は食事の後片付けをして少しの酒を嗜んでいた。

馬車の中からはレオンの小さな呻き声のとデイスワード卿の声が微かに聞こえてくる。

護衛達の顔には嫌悪する表情が浮かんでいた。

「あんな声が聞こえたんじゃ酒も不味いですねえ。私は先に寝かせて貰いますよ」

「ちっ！ 俺も先に寝たかったぜ」

「まあぼやくな。あんな声が聞こえたんじゃ、気分良く眠れやしないさ」

「ふっ、確かにな」

火の番と見張りを兼ねる1人の護衛を残し、他の者は毛布を被り

適当な場所で横になる。

延々と続くレオンの呻き声と厭らしい老人の声に、護衛達は耳を塞いで眠りに就いた。

辺りはすっかり闇夜と化していた。

焚き火の炎と馬車の中に灯る明かりのみである。

そんな時に突如として馬車の中にデイスワード卿の声と思われる悲鳴が鳴り響いた。

眠りに就いていた護衛は飛び起き、見張りの男も何事がと馬車の扉に手をかけた。

と、同時に扉が中から勢いよく開かれる。

レオンがほぼ全裸に近い状態で飛び出してきた。

その顔と身体は血でまみれている。

馬車の中を覗くと股間を押さえてうずくまり、悲鳴のような叫び声をあげるデイスワード卿がいる。

馬車の中にも鮮血が飛散っていた。

馬車の中を見た護衛達はその場で顔をしかめ、固まってしまう。

レオンは後ろを顧みず一目散に闇夜へと姿を消した。

数秒かそこで事態を把握した護衛達。しかしその異常事態に次の行動が起せなかった。

このままデイスワード卿を置いてレオンを捕まえに行くべきかどうかを悩んでいた。

あまりの出血にこのまま放置すれば死ぬのでは無いかと思われたからだ。

困惑しながらも護衛達のリーダーらしき男が、皆に指示をだす。

「アザト、お前はガキを追え。リゴール、お前は王都に走れ。医者

か治癒魔法師を連れてくるんだ。御者、伯爵の止血をするから手伝ってくれ」

2人の護衛は首を縦に動かただけで、すぐに行動を開始した。アザトと呼ばれた護衛は馬に飛び乗ると、街道を西、王都に向けて走り出す。もう一方のリゴールはレオンが走り去ったと思われる方向、闇の中へと姿を消した。

リーダーらしき男は、このまま馬車で王都に戻る事も考えたが、馬車の揺れが傷に響くだろうと、医師を呼びにやり、ここで待つことを選んだ。

もしこのままデイスワード卿が死ねば自分達の定職が失われる事になる。さらには責任を追及されかねない。助かってもガキを逃がしたのであれば厳罰を下されそうだ。

伯爵の命を助け、奴隷のガキまで見つけねばならない。

この最悪の現状に思わず心の声が口から漏れていた。

「くそ変態じじいが……」

「……」

御者も同じ思いなのだろう。口にこそ出さないが、その苦笑が物語っていた。

しかし彼らの悲劇はまだまだ続いたのだ。

\*\*\*

「ガザブルさん、起きて！」

焚き火の守りをしていたメアリーがガザブルをたたき起こす。

先ほど眠りに就いたばかりのガザブルは、まだ眠りも浅く、直ぐに目を覚ました。

「ん…… どうした？」

「緊急事態よ。なにがあったか解からないけど、馬車から悲鳴が聞こえたわ」

「なにい、どういうことだ？」

「わからないわよ。でも馬車でなにかが起きた。それだけは事実よ」「盗賊か何かに襲われたってことか？」

「だから、わからないってば。でも、そんな気配は無かったはず。蹄の音も聞こえなかったし争う声もなかった。———と待って

……」

「ん？」

真剣な面持ちで耳を澄ますメアリーを、怪訝な顔で眺めるガザブル。

だが、この距離ではガザブルには何も察知する事は出来ない。

メアリーに頼るしかなかった。

「馬が一頭こっちに向かって来るわ」

「なんだとっ。———気付かれたのか？」

「ありえない。向こうには人間しか居なかったはずよ」

「まあ、1人なら都合が良いじゃねえか。捕まえて何があったか聞き出せば良い」

「そうね」

ガザブル達は火を消すと、街道に身を潜めた。

直に来るであろう護衛の一人を不意打ちで捕まえるためだ。

身を潜めて1分もしない内にガザブルの耳にも蹄の音が聞こえた



した。

「来たわよ」

「ああ、聞こえるぜ」

「わたしが馬から引き摺り落とすから、後はヨロシクね」

「任せろ！」

言ってる傍から視界に馬が映った。

その馬の背に跨っているのはデイスワード卿の護衛の1人、リゴールだった。

メアリーは馬を視界に収めると、素早い動きでリゴールが気付く前に馬の背、リゴールの後ろ側に飛び乗った。

「なっ?!」

ほんの一瞬の出来事だった。

メアリーはリゴールの後方に飛び乗り、そのまま首に腕を回すと相手と一緒に馬から落ちたのだ。

地面に落ちると2人はゴロゴロと転がった。1, 2転したところでメアリーはリゴールから離れたが、そこにガザブルが走りより、リゴールを後ろ手に締め上げた。

リゴールは一声発しただけで、なにがなんだか判らないといった顔だったが、直ぐに苦渋の面持ちに変わっていた。

その身はうつ伏せ状態で、後ろ手に腕を締め上げられている。さらには短剣が首筋に当てていた。もはや抵抗の余地は皆無だった。

「そうそう、大人しくしてりゃ命までは取らねえよ」

ガザブルがそう呟くとメアリーが続きを述べた。

「ただし、――――私達の質問に素直に答えてね。でないと痛い目にあうわよ?」

冷笑交じりの美しい声音だった。

リゴールは素直に首を縦に一度動かすのみ。

ガザブル達は馬車で何があったのか、なぜ1人にこちらに向かって来たのか、他の護衛は何をしているのか、などを聞き出した。

リゴールは、別に聞かれて困る内容でもなかったのだろう。素直に喋ってくれた。

しかしその顔は嫌悪に満ちていて、口にするのもおぞましいと言った表情だった。

ガザブル達は自分達の安全の為、伯爵もろとも、護衛3人と御者を殺すつもりだった。

しかし、リゴールの口調から、伯爵を嫌悪していることが読み取れたので殺す事を躊躇した。

「おめーを殺すかどうかは後で決める。とりあえずそこでじっとしていて貰おう」

「って、こんなトコに縛られて、魔獣が来たらどうするんだ」

「そんなときは運が無かったと諦めな」

「おい、そりゃないぜ。頼むから助けてくれ」

「まあ、そんな時間はかからねえ、大人しくしてりゃあ、魔獣も気がつかねえよ」

ガザブルは助けてくれと懇願するリゴールを無視して馬車へと向かった。

護衛達のリーダーである男と伯爵を殺す事が目的だった。

メアリーはリオンを追ったアザトを探しに向かう。

出来ればアザトを殺し、レオンの保護が目的だった。

微かな音を頼りに探すこちらはメアリーにしか出来ないことだから当然の役割だといえる。

1対1なら護衛達を凌ぐと自負していただけに、ガザブルはいともあっさり護衛のリーダーを地に伏せていた。

殺すつもりだったが、素直に負けを認めたので、とりあえず生かしている。

護衛のリーダーを御者と一緒に縛り上げると、馬車を覗き込んで目を見張った。

下半身は下着すら着けておらず血にまみれている。

さらに、見たくも無いものが床に転がっていた……

そんな醜態を晒す伯爵を、一思いに殺そうかと思っていたが、ほって置いても直に死ぬだろうと放置することにした。

そのまま待つこと数十分。

メアリーのことを心配しないわけではないが、護衛一人に遅れを取るとは思えない。

探しにいつて迷うより、待つ方が賢明だと判断したのだ。

戻ってきたメアリーは1人だった。

「ん？ 1人か…… 護衛とガキはどうした？」

「アザトって護衛は縛り付けてる。でも……子供は見つからなかったわ」

「おめーの耳と鼻でもか……」

「ええ、訓練でもない限り足音は殺せるもんじゃないし、どこかで身を潜めているのかもしれないわ。血の匂いもたどったけど、血

の付いた衣服が落ちてただけで子供の姿は無かった」

「そうか…… まあ、おめーが見つけれねえなら仕方がねえな……」

「そうね、とりあえずここでジツとして、彼が動き出すのを待つしかないかな。たぶん動いてくれれば微かな足音が聞こえると思う」

「遠くに行つてなきや良いがな」

「ええ……」

落ち込んだ表情のメアリー。

しかしそれを慰めるすべをガザブルは知らなかった。

そんな2人に護衛のリーダーが声をかけた。

「あんた達は何が目的なんだ？ 盗賊つてわけじゃなさそうだが……」

……

「ん？ 今の会話を聞いてわからねえのか？」

「いや、奴隷のガキが目的みたいに聞こえたが、まさか本当にガキを助ける為だとか言うつもりなのか？」

「ああ、その通りだ」

「なぜだ？ ガキの身内か？ それにしても犯罪なんだぞっ」

「さあ、なんでだろうな…… ただ、あのガキが、下衆貴族の玩具にされるのが我慢出来なかっただけだ」

「……まあ、その気持ちは解からない事もないが、それにしても……」

「ちょっと、静かにしてくれない？ もし彼が動き出しても、声が邪魔で聞き取れないかもしれないわ」

「おっとすまねえ、って言うわけだ。おめーも黙ってて貰おうか？ これ以上喋るなら殺すしかなくなるぜ？」

「……わかった」

そして夜が明けた。

結局、メアリーでさえレオンの気配を捉える事が出来なかった。  
夜が明けて、辺りを少し探索し、その答えが見つけることが出来た。

森林の奥に川が流れている。どうやら川に入りその水音で足音と血の匂いを消して逃げたんだろうと言うのがメアリーの結論だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5891x/>

---

烙印　ーブランドー

2011年10月24日12時10分発行